[6] 考察と今後の課題

研究初年度の昨年は、コミュニケーションに関わる実態の把握に努めてきたが、今年度は、実態把握をより多様に行うとともに、実践を重視する立場から「授業づくり」に力を入れてきた。

本校中学部の生徒は、生活上の経験の不足からコミュニケーションの重要な部分である「社会化」・「表現化」（段階別教育内容表における）において遅れが指摘されている。特に周囲との対話を進める上での言語力の不十分さや、相手の発言をうまく理解する力（判断力・認知力・数概念など）において遅れをとっている生徒が少なくないことも明らかとなった。

このような実態に対応するため、より豊かなコミュニケーションの力を育てる場として、生活単元学習を中心とする授業の中で、その知識や方法を学ばせるだけでなく、コミュニケーションの機会をより豊富にする「授業づくり」に創意や工夫をこらしてきた。

特に、大単元間に継続性を持たせ単元目標の発展を企図してきた。このことは、「野外炊飯」から「ミニキャンプ」、そして「大山林間学校」にとどまらず、「学習発表会」の単元にまで継った実践となり大きな成果がみられた。

しかも、この大単元の流れが、縦割りグループで取り組まれ、学級の中では、ほとんど発表したりする機会もなく過ごしてきた生徒が、リーダーシップを発揮するなど、生徒間のやりとりにも新しい局面が展開されただけでなく、生徒個々の存在感を感じとれる一年となった。

我々は、コミュニケーションの力を育てる学校における中心的な場は「授業」であると位置づけてきたが、その授業の中で、豊かに自分の思いを語り、相手が伝えようとする思いを正しく受けとめようとする思いやりに充ちた雰囲気が学部内に生まれつつあることに大きな確信をもった。

このような成果や前進とともに、縦割りグループによる取り組みを主軸としたことにより、基礎集団である学級（学年）集団としての活動場面をせばめてしまったこと、また、縦割りのために、我々教師の側に、新たなる生徒の実態把握に時間を要した点などの課題が残った。

コミュニケーションの力を育むということは、生徒同士の間に自由に楽しく語り合う雰囲気をつくり上げ、意欲をもって活動できる指導計画が用意されて初めて可能となる。こうした点では単元構成に対する工夫もあって、発表・表現などの場となる「学習発表会」の単元などで、その力を発揮しえたと思う。

また、個の課題に対応した取り組みとなる課題別学習の充実にも努めてきたが、時間数の確保や、学級（学年）での学習における教科・領域との関連などが今後の課題となっている。

中学部は、従来より学習に対する父母（家庭）との連携・協力を重視してきたが、生活ノート等を通して、家庭でのコミュニケーションの拡がりをも要請し、その成果も見えはじめている。

なんといっても、我々は、こうした諸課題に対して着実な対応を考え、研究最終年次の来年度にむけて、大きな育ちを創り上げていきたいと思う。

この子らが、将来、社会の一員として、豊かな心を育み、たくましく生きていく力をこそ育てていくことが我々の使命であると考え一層の努力をしていきたいと思う。